

夏秋トマトの2本仕立てによる裂果軽減対策

【要約】夏秋トマトにおいて生育途中で脇芽を利用して2本仕立てとし、隣接する株の茎によって果実への強日射を遮蔽することで、秋季に発生する裂果が軽減される。

中山間農業研究所・試験研究部・田中良憲

【連絡先】0577-73-2029

【背景・ねらい】

夏秋トマト栽培で問題となる裂果の発生要因の一つとして強日射が挙げられる。遮光資材の利用によって強日射を防ぐことは可能であるが、茎葉全体を遮光するため気象条件によっては過剰な遮光で光量不足となり、収量低下を招く可能性がある。また、気象条件に応じた遮光資材の自動開閉を行う場合には、高額な制御装置を導入する必要があることから、産地においては遮光資材の導入は進んでいない。そのため、特別な資材を使用せず、2本仕立てによって裂果発生を軽減することをねらいとする。

【成果の内容・特徴】

- 1 腋芽を利用して2本仕立てとする（図1）ことで、隣接する株の葉によって果実に照射する日射を遮光し、秋季に発生する裂果の発生を軽減する（表3）。
- 2 2本仕立てとしてからの通気性を確保するため、定植時の株間は斜め誘引の場合は50cm、直立誘引の場合は40cmを目安とする。
- 3 販売単価の高まる秋季の収穫比率が増加し、販売額の増加に結び付く。

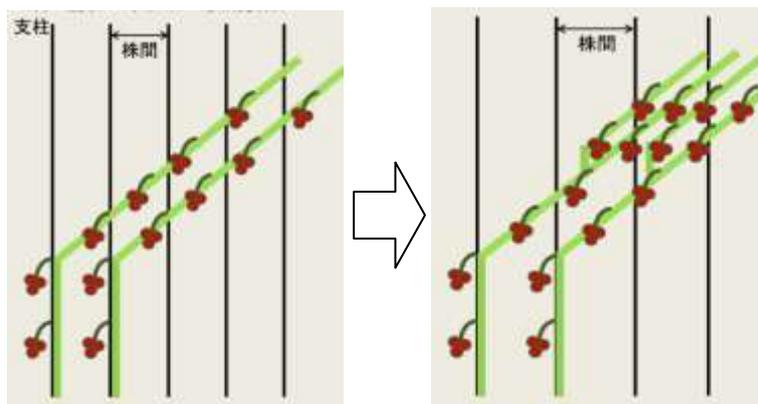


図1 2本仕立てのイメージ（斜め誘引の場合）

表1 試験区の栽植密度及び果房数（試算値）

区	誘引法	株間 (cm)	側枝利用位置	栽植密度 (株/a)	果房数(房/a)		
					主枝	側枝	計
株間50cm	斜め	50	第5果房直下	167	1,833	833	2,667
斜め慣行	斜め	40	無	208	2,292	0	2,292
株間40cm	直立	40	第2果房直下	250	1,500	1,000	2,500
直立慣行	直立	35	無	286	2,000	0	2,000

注) 6m間口ハウスにおいて、斜め誘引は5条植え、直立誘引は6条植えとした。
斜め誘引法は本所、直立誘引法は支所において試験した。

別紙様式

【成果の活用・留意点】

- ・ 栽植密度が低く 7～8月の裂果発生率が増加する傾向にあるが、作型全体としては裂果の発生率は減少する。
- ・ 2本仕立てとしてからは草勢が低下しやすいので、葉柄汁中硝酸イオン濃度を確認しながら施肥量を調節する必要がある。草勢が維持できない場合は側枝を早めに摘心する等の対策を行う。
- ・ 2本仕立てとしてからは、ホルモン処理、腋芽かき、誘引作業が増加するため、労働力の確保状況にあわせて導入面積の決定を行う。

【具体的データ】

表2 収量性及び果実品質

区	収穫果数 (個/a)	可販収量(kg/a)			平均1果重 (g)	規格品率(%)			
		主枝	側枝	計		A品	B品	C品	外品
株間50cm	5,365	649	211	860	200	37	25	19	20
斜め慣行	5,520	818	-	818	183	27	29	23	22
株間40cm	6,000			990	201	17	33	31	19
直立慣行	4,428			685	220	13	24	32	31

注) 収穫期間は斜め誘引で 7/15～10/31、直立誘引で 8/20～11/21。

表3 裂果及び空洞果の発生状況 (単位%)

区	裂果		空洞果	
	B品+C品	外品	B品+C品	外品
株間50cm	9	2	27	6
斜め慣行	8	5	32	2
株間40cm	22	8	26	1
直立慣行	24	13	18	4

研究担当者：田中良憲、二村章雄、熊崎晃（中津川支所）